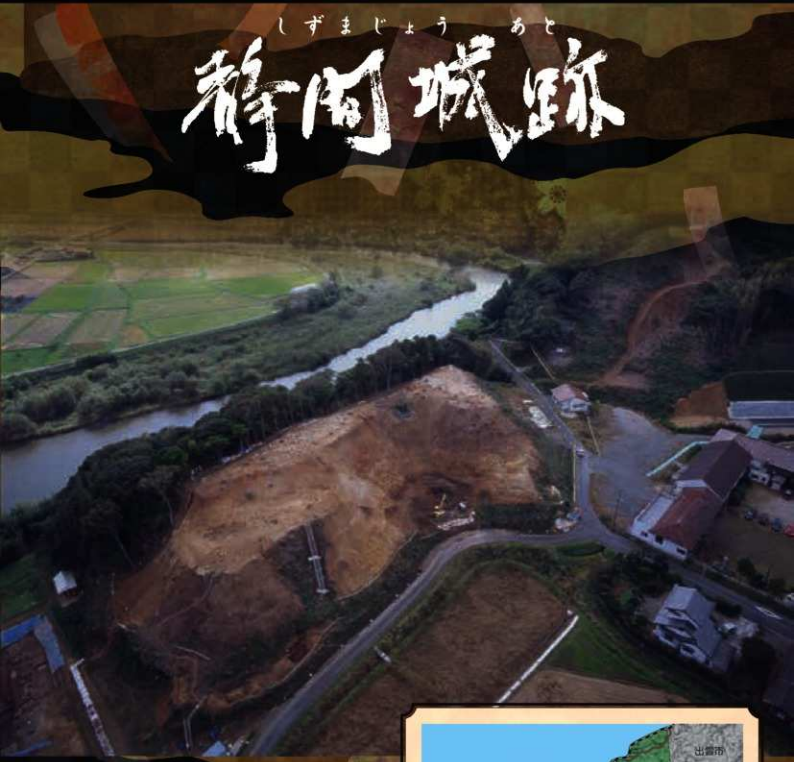
静間城跡

しずまじょうあと



はじめに

静間城跡は大田市静間町に位置する戦国時代の山城です。

山陰自動車道（大田静間道路）の建設に先立ち、平成28年（2016年）に発掘調査が行われました。

調査の結果、戦国時代前半における居館を兼ねた山城の様子が明らかになりました。

このパンフレットでは、調査で見えてきた静間城の姿をお伝えします。

島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

これが静間城の全貌だ！

❖姿を現した静間城!?❖

静間城跡は大田市の静間川左岸に位置する低丘陵上に築かれた、主郭と北郭の２つの郭（くるわ）から構成される山城です。静間川に面する南側斜面を除くほぼ全域の発掘調査が行われました。島根県内で山城の全域が発掘されたのは極めて珍しいことです。

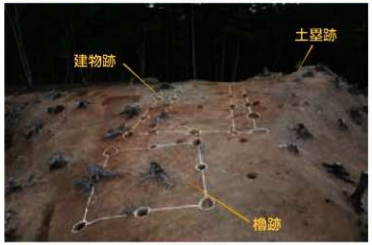
主郭は山頂部にある東西に細長い平坦面で北郭はその下に位置する少し小さな平坦面です。調査の結果、大規模な建物跡や土塁などが見つかりましたが、堀切（ほりきり）や竪堀（たてぼり）など、山城に通常見られる防御施設は確認できませんでした。防御施設は城を守るためには重要な施設であるにもかかわらず、それらがほとんど存在しない静間城跡は軍事的な性格の弱い山城であったといえます。

明確な建物跡は全部で８棟見つかり、遺物も国産陶器のほかに貿易陶磁器も多数出土していることから戦時だけでなく日常的にここで暮らしていたことがわかりました。15世紀後葉から16世紀前葉頃までの比較的短期間ですが、丘陵上に築かれた居館的な居住空間を兼ね備えた山城であったことが想像できます。

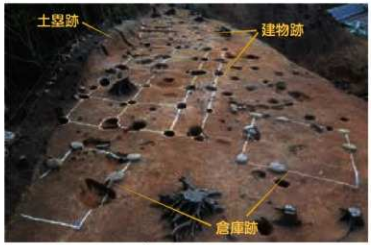
この静間城跡は、南に静間川、北には日本海が一望でき、海上交通やその周辺の交通路を見渡せる場所に立地していました。このことから交通の要所の監視や支配を目的として築かれた可能性も考えられます。

また、今まで県内での城跡の調査例は少なく、山城＝戦闘施設といったイメージが強かったのですが、今回の調査結果では、戦闘の場としてだけでなく、日常生活の場、城の維持管理の場など様々な機能を持っていたことがわかりました。

静間城跡上空から日本海を望む



大型建物と櫓

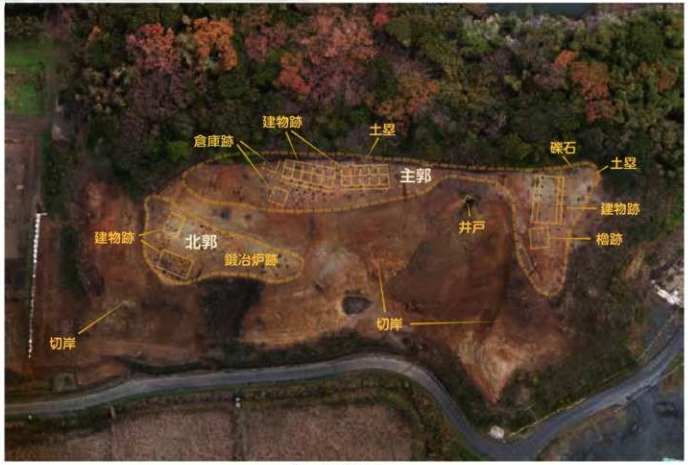


大型建物と倉庫

切岸

土塁

つぶて石



静間城跡平面

静間城跡立面

❖城を守れ！❖

防御施設としては土塁（どるい）と切岸（きりぎし）のみが確認されています。堀切や竪堀などの通常の山城に見られる防御施設を備えていない点が静間城跡の特徴といえます。

斜面全体を切岸にすることで、麓から見ればそびえ立つように見える城を演出していたのでしょうか。土塁は主郭全面を廻るものでなく２箇所の高まりのような状態で建物と接するように築かれていました。建物を防御することを最大の目的としていたようです。

また、城主が暮らしていたと考えられる建物の横には投石用のつぶて石も置かれていましたが、これだけの防御施設で城を本当に守ることができたのか気になるところです。

❖静間城の営み❖

建物跡は主郭で６棟、北郭で２棟見つかりました。これらは主に住まいや倉庫として使われていますが、主郭の西側のものには監視用の櫓も存在しています。その南側には城の中で一番大きな建物が建てられていました。２～３の部屋に分かれ、東西両側に庇（ひさし）が付いた立派な建物です。ひょっとしたら城主が暮らしていたのかもしれません。その建物の東側にも大きな建物があり、周辺からは茶道具なども出土していることから、お客を招いて「茶の湯」でもてなしていたことが推測されます。この建物は16世紀前葉頃に火災に遭っていますが、建て替えられることはなかったようです。

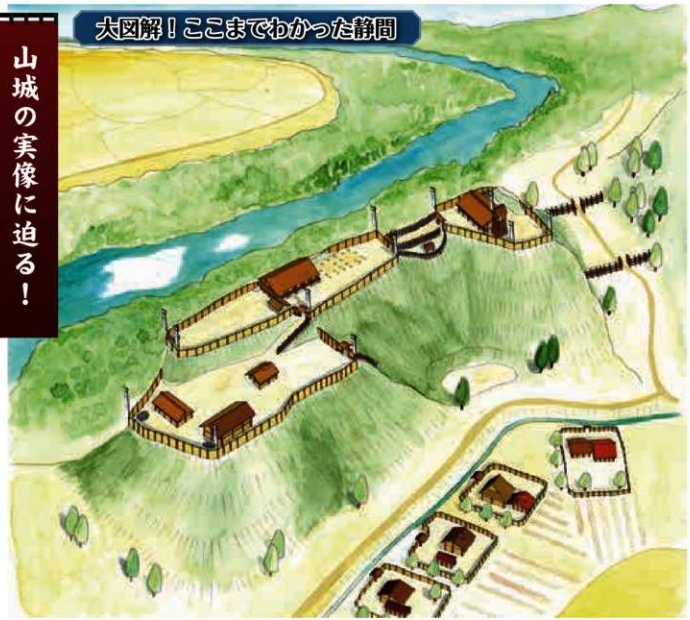
北郭では建物の他に鍛冶炉も見つかりました。城主が直々に金属加工に関わることはないと思われ、築城時ないし修繕用の鍛冶工房として利用されていたと考えられます。

用語説明

堀　切…敵の侵入を防ぐために尾根を寸断した堀。
竪　堀…山の斜面に縦方向に掘られた堀。
郭（曲輪）…堀や土塁、切岸で囲んで作った城内の区画。建物を建てたり、兵を配置するために使用された。
切　岸…斜面を削って作った人工の壁。
土　塁…郭の周囲などに敵の侵入を防ぐために作られた土手。

山城の実像に迫る！

大図解！ここまでわかった静間



静間城を推定した復元図です。主郭からは6棟の建物跡が見つかっていますが、すべてを建ててしまうと軒があたってしまうので、途中で建て替えた可能性が考えられます。図は立て替え後の16世紀前葉頃を想定しました。各郭の縁辺部分は盛り土が崩れ落ちており、本来はもっと広かったことが分かっています。山頂に立つと日本海からの風が強くあたることから、崩れた縁辺部分には塀がめぐらされ城道や門を伴っていたものと思われます。また主郭に建てられた櫓は切通しを望む場所に位置しており、山麓の通行を監視していたようです。城の周りには新見荘の領主館のように家宅が並んでいたものと考えられます。

静間城の終焉！

主郭北側にある建物跡1棟と倉庫跡1棟は火災によって焼失していました。これらの建物跡を覆う土砂には焼土が混じり、この焼土の中から焼け焦げた陶磁器や石臼、大量の釘が出土しました。陶磁器の年代から16世紀前葉ごろに火を受けたと思われます。城跡全体でもこの年代より新しい遺物が見つからないことから、火災を境にして静間城を廃したと思われます。

火災の原因は分かりませんが、16世紀前葉は石見銀山をめぐって近隣勢力が相次いでこの地域に侵攻した時期にあたっています。

静間城跡 主郭北側
焼土混じり層

山上に居館現る！

京都府立京都学・歴彩館所蔵
東寺百号文書『新見荘谷内屋敷指図（サ函399）』より作図

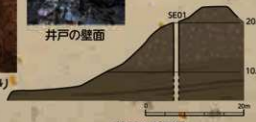
静間城は山頂を平坦にして大小の建物を建てています。この山頂で見つかった建物群の配置は、岡山県にあった新見荘という荘園を管理した領主館の様子とよく似ています。新見荘の領主館は大型建物である客殿と主殿を中心にした二つの空間に分かれます。静間城も山頂という狭い空間にも関わらず、大型建物を中心にした二つの空間に分かれていました。こうした建物配置と規模からみて、静間城は当時「静間郷」と呼ばれた地域を治める小領主が築いたものと思われます。

応仁の乱によって世は乱れ、15世紀の終わりから16世紀初めごろになると戦乱が各地に広がります。政情が不安定になるとそれまで平野にあった館を山に移築する動きが全国各地でみられました。「静間郷」では上静間氏と近隣の石見吉川氏が36貫の領地をめぐって60年間にわたって争っていましたので、そうした緊張関係が静間城を築いた理由だったのかもしれません。

どこまで掘ったの？深い井戸

井戸の断ち割り

井戸の壁面



井戸の断面図

主郭の鞍部には井戸が掘られていました。全体は四角く掘られており、壁面には無数の鑿の痕がみられます。調査では11m掘り下げましたが井戸の底には届きませんでした。おそらく地下水源まで達しているものと思われます。

お城のなかでトンテンカン！

鉄滓（奥）と羽口（前）

北郭では鍛冶炉跡が2基確認され、写真は1号炉のものです。形状は細長い楕円形に近く、長さ1m、深さは最大で18cmの大きさでした。内部には炭化物とともに鍛冶滓が大量に含まれていました。

出土遺物に武器等の戦闘に関わる製品はほとんどなく、建築部材用の釘等が主であることから、城の維持管理に必要な部材を生産していた可能性が高いと考えられます。

乱世に生きる！

風雲急！静間城をとりまく諸勢力

応仁の乱（1467～77）で室町幕府の力が弱まると、各地の領主が割拠する戦国時代になります。16世紀の始め頃、静間城のある石見地方東部は山口に拠点を置く大内氏の支配下にありました。石見銀山が開発されると、周辺の諸勢力は銀山の領有をめぐって激しく争います。

主君の名は？

	石見国	
守護職	山名・大内氏	
在地領主	国人・国衆	
領民	足軽・農民	

室町幕府は国ごとに守護を任命して統治させ、また地域ごとに小領主がいてそれぞれの領地を治めていました。

当時「静間郷」と呼ばれた地域を治める領主が静間城を築いたものと思われますが、残念ながら城主の名前は分っていません。「静間郷」には「上静間」氏が存在していたことが知られていますので、「下静間」と名乗る一族もいたかもしれません。

静間城への陶磁の道！

静間城跡からは東アジア各地で生産された焼物が出土しています。日本国内では岡山県の備前焼や愛知・岐阜県の瀬戸・美濃焼が見つかり、また朝鮮半島からは舟徳利や小皿が海を越えて運ばれました。

中国で作られた焼物は東シナ海に面する州の「博多」を経由して国内各地に運ばれた時日本に盛んに輸出された綿花とともに朝鮮から積み出され、こちらは「対馬」経由もしく考えらえています。また備前焼は瀬戸内海にまわって日本海に入り、「美保関」を中継地にすり鉢を「かがつ（ち）」というのはその名残「寧波」の港から日本に向けて積み出され、九ものと思われます。また朝鮮半島の焼物は、当海峡に面した「三浦（釜山・齊浦・塩浦）」かは直接山陰の港にもちこまれたのではないかと面した「加賀津」から積み出され、関門海峡をして運ばれるルートが想定されます。出雲弁でだといわれます。

殿のためなら粉まみれ!?

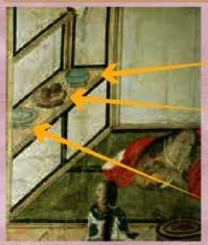
備前焼すり鉢 ×12

石臼 ×3

卸皿 ×2

調査では備前焼のすり鉢12個分、分が出土しました。「備前すり鉢、投に壊れたとは思えず、城内で盛んに粉城内に領主の館があることから主に、長引く戦乱に備えて、保存食や携ん。戦乱の合間には茶臼でお茶を挽い石臼3個分、瀬戸・美濃焼の卸皿2枚げても割れぬ」といわれた備前焼が頻繁砕加工をしていたものと推定されます。食品や薬品をつくっていたと思われます行食、薬品などを蓄えたのかもしれませて噛んでいたようです。

館を飾った調度品！



兵庫県立歴史博物館所蔵『福富草紙』より

龍泉窯　青磁碗

南平茶洋窯
天目碗

龍泉窯　青磁盤

15世紀の説話を描く『福富草紙』には裕福になった主人公の生活が描かれ、書院棚の上には富の象徴として天目碗や青磁の碗や盤が飾られています。静間城跡の調査でも、こうした天目碗や青磁碗・盤などが出土しており、「静間郷」を領する領主が実際にこうした焼物を所有していた様子をうかがうことができます。

磨けば光る「わび・さび」の原石!?

15世紀後半ごろから備前焼は壺・甕・すり鉢に加えて、筒形鉢や輪花鉢などを作るようになり、静間城跡からも出土しました。これらの鉢のなかからは、のちに「わび茶」の流行とともに茶道具に見立てられたり、仕立て直されるものが出現します。静間城の活動時期は「わび茶」が流行する以前なので、どのように扱われていたのかは分かっていません。

備前焼　筒形鉢

備前焼　輪花鉢

静間城の時代年表

西暦（和暦）	主な出来事
1467年（応仁元）	応仁・文明の乱が始まる(~77)。中央の権力が弱体化する。
1481年（文明13）	上静間右馬充と吉川兼祐(石見吉川氏)が上静間郷36貫の領地をめぐり争論する(～1541)。
この頃、静間城築城か？	
1493年（明応2）	北条早雲が堀越公方を滅ぼし、伊豆国を手に入れる。戦乱は地方に広がり、下剋上となる。
1517年（永正14）	毛利元就が武田元繁を破る（有田中井手の戦い）。
1526年（大永6）	神屋寿貞が石見銀山を発見する。（銀山旧記による）
1530年（享禄3）	小笠原長隆が銀山を寄取する。
1533年（天文2）	大内義隆が石見銀山を取り返す。
1537年（天文6）	尼子経久が石見に侵攻する。
この頃に主郭の建物2棟が焼失する。静間城は廃城されたか？	
1543年（天文12）	種子島に鉄砲が伝来する。
1549年（天文18）	フランシスコ・ザビエルがキリスト教を伝える。
1551年（天文20）	陶隆房の謀反により大内義隆が討たれる。織田信長が家督を相続する。

静間城跡の出土品

白磁皿（中国 邵武窯系）
15世紀後半代

青磁碗（中国 龍泉窯系）
15世紀後半代中葉

青花碗（中国 景徳鎮窯系）
15世紀中～後半頃

卸皿（瀬戸・美濃系）
15世紀後半代

舟徳利（朝鮮）
15世紀後半～16世紀前半代

すり鉢（備前系）
15世紀後半～16世紀初頭頃

壺（備前系）
15世紀末～16世紀前半代頃

銅銭（中国北宋）
「元□□寶」と「紹定通寶」

茶臼（安山岩製）

鉄製品各種

今後もみなさまに発掘調査の様子をわかりやすくお伝えします。
また、各発掘調査現場では現地説明会を行っています、ぜひお越しください。

編集・発行　平成30（2018）年10月　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒690-0131　松江市打出町33番地　TEL0852-36-8608
E-mail　maibun@pref.shimane.lg.jp
URL http://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/